

## 国立国際美術館 収集の概要（令和5年度）

国立国際美術館では、日本の美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品・その他資料のうち、1945年以降を重点的に収集している。なかでもとりわけ、同時代性の高い先端的な美術を中心に調査・研究を行い、総合的な影響関係を踏まえつつ、ジェンダーバランスの是正や、非欧米地域の動向、国内の地域バランスにも配慮しながら、今後の美術史に寄与する作品を体系的に収集している。

令和5年度は、ルイーゼ・ブルジョワ《カップル》（1996年）、レオノール・アントゥネスの作品3点（《道子#6》（2023年）ほか2点）と、立体作品を手掛ける女性作家の代表的な作例を収蔵することができた。またこの他、国内外で高く評価される田中功起の初期を代表するシングルチャンネルの映像作品、類例のないセルフ・ポートレート写真で世界的に活躍する片山真理の作品、アジア地域で高く評価される檜木知子の絵画など、多岐にわたるジャンルを収集し、女性作家の作品も積極的に収集した。その他、カンボジア出身のクワイ・サムナン映像インスタレーションなど、地域の多様性にも配慮する作品収集を実施するなど、収集方針に基づいた作家・作品選定を行なった。





## 国立国際美術館 美術作品購入一覧（令和5年度）



= 特別予算購入

1	★	種別	彫刻
		作者名	レオノール・アントゥネス(1972-)
		作品名	M. Y. との相違
		制作年	2021年
		材質・形状	エンゴベ（化粧土）、施釉された陶
		寸法	2点組、サイズ可変
		解説	アントゥネスは1972年ポルトガルに生まれ、2005年よりベルリンを拠点に活動する女性作家。20世紀の男性中心の制作現場で奮闘した女性建築家やデザイナーといった先人たちの仕事に触発され、多様な素材を工芸的な職人技により連結した彫刻・インスタレーション作品で知られる。男性中心主義的なモダニズムの歴史を相対化するとともに、素材の置き換えによってモダンデザインに物質性と伝統技術の結びつきを蘇らせようとする再解釈の試みは世界的な評価を得ている。本作は、1930年代にバウハウスで学んだ山脇道子による絨毯のデザイン原画に着想を得ている。原画のプロポーションに忠実でありつつも、素材を布ではなく陶にし、複数のパーツで構成されたユニットとして縦や横に拡張した。時代を超えた女性たちの日本とヨーロッパの往来により生まれた作品であるとともに、美術・建築・デザイン・工芸の領域横断的な作品である。
		取得額	-
		展示予定	令和6年度「コレクション1 彼女の肖像」（2024年11月2日～2025年1月26日）で展示予定
2	★	種別	彫刻
		作者名	レオノール・アントゥネス(1972-)
		作品名	シャルロット#7
		制作年	2021年
		材質・形状	杉、施釉された陶
		寸法	153.0 × 61.5 × 37.4 cm
		解説	アントゥネスは1972年ポルトガルに生まれ、2005年よりベルリンを拠点に活動する女性作家。20世紀の男性中心の制作現場で奮闘した女性建築家やデザイナーといった先人たちの仕事に触発され、多様な素材を工芸的な職人技により連結した彫刻・インスタレーション作品で知られる。男性中心主義的なモダニズムの歴史を相対化するとともに、素材の置き換えによってモダンデザインに物質性と伝統技術の結びつきを蘇らせようとする再解釈の試みは世界的な評価を得ている。本作は、1940年に輸出工芸のアドバイザーとして来日したシャルロット・ベリアンによる竹と漆のナイトテーブルがモチーフである。アントゥネスは素材を陶と杉に置き換え、機能性を取り払った空間に調和する鑑賞対象として提示する。時代を超えた女性たちの日本とヨーロッパの往来により生まれた作品であるとともに、美術・建築・デザイン・工芸の領域横断的な作品である。
		取得額	-
		展示予定	令和6年度「コレクション1 彼女の肖像」（2024年11月2日～2025年1月26日）で展示予定
3	★	種別	彫刻
		作者名	レオノール・アントゥネス(1972-)
		作品名	道子#6
		制作年	2023年
		材質・形状	真鍮
		寸法	サイズ可変(6点組)
		解説	アントゥネスは1972年ポルトガルに生まれ、2005年よりベルリンを拠点に活動する女性作家。20世紀の男性中心の制作現場で奮闘した女性建築家やデザイナーといった先人たちの仕事に触発され、多様な素材を工芸的な職人技により連結した彫刻・インスタレーション作品で知られる。男性中心主義的なモダニズムの歴史を相対化するとともに、素材の置き換えによってモダンデザインに物質性と伝統技術の結びつきを蘇らせようとする再解釈の試みは世界的な評価を得ている。本作は、1930年代にバウハウスで学んだ山脇道子による当時の織物デザイン原画に着想を得ている。素材に人の手による修繕を要する真鍮を選ぶことで、時間と用途の密接な関連性も示している。時代を超えた女性たちの日本とヨーロッパの往来により生まれた作品であるとともに、美術・建築・デザイン・工芸の領域横断的な作品である。
		取得額	-
		展示予定	令和6年度「コレクション1 彼女の肖像」（2024年11月2日～2025年1月26日）で展示予定

4		種別：彫刻 作者名：ルイーズ・ブルジョワ(1911-2010) 作品名：カップル 制作年：1996年 材質・形状：布、詰め物、ステンレススチール、木、ガラス 寸法：38.0 × 68.5 × 70.2 cm、台：178.2 × 112.0 × 97.0 cm 解説：1911年パリ生まれのブルジョワは、30年代に活動をスタートし、38年にニューヨークに移住後は2010年に没するまで同地を拠点に活躍した美術家である。有機的で触覚的な素材や形態を用い、個人的な記憶、経験、感情をフェミニズムや精神分析的アプローチで昇華させるその作品は、モダニズム美術の歩みとは一線を画し、その流れに抵抗するものでもあった。90年代以降、自身や家族、実家にまつわる布を作品に用いるようになるが、やがて96年からは詰め物をした立体作品へと展開した。本作はその立体作品としては最初期の一点で、固く抱き合うカップルを表現するが、生死、愛憎あるいは愛の行為と暴力的な行為といった両義性が内包されている。ブルジョワは20世紀、21世紀を代表する美術家の一人であり女性の彫刻家の先駆的存在でありながらも、国内での所蔵は少なくパブリックコレクションにもブロンズや大理石の彫刻が数点あるのみだった。特に後期の仕事において重要な位置づけにある布による立体作品である本作を収蔵する意義は大きい。
		取得額：508,201,500円 展示予定：令和5年度「コレクション2 身体—身体」（2024年2月6日～4月8日）にて展示実施
5		種別：洋画 作者名：谷原菜摘子(1989-) 作品名：SADO 制作年：2015年 材質・形状：油彩、アクリル、グリッター、金属粉、スパンコール、ラインストーン、ベルベット 寸法：130.3 × 194.0 cm 解説：谷原は1989年埼玉県に生まれる。本作に描かれた、少女が人魚の肩を刃物で切断するといった残酷な光景は、谷原作品の中心主題として常に扱われてきた。当初は素朴な戯画調の表現だったが、その後本作に見られるような緻密でリアルな表現に転じた。支持体として用いた黒いベルベットも相乗効果を生み出し、独特な不気味で暗い表現をつくりだした。光を反射する素材もその一助となった。画面に大きく描かれた少女と人魚の二者は、自らがモデルとなったと作家は言う。暗い記憶を相対化するために加虐と被虐をモデル化した上で作品にすることによって、谷原は普遍的なスタイルを獲得するのである。「SADO」というタイトルには、茶道、左道、サド(サディズム)といった言葉の遊びもある。茶道とサドを結びつけるものは無いはずだが、谷原はその二つを自作によって結合させた。「マイクロポップ」とも称された先行世代による表現とは明らかに異なる日本における新たな絵画動向を研究、紹介するうえで極めて重要な一点であろう。
		取得額：- 展示予定：令和6年度「コレクション1 彼女の肖像」（2024年11月2日～2025年1月26日）で展示予定
6		種別：洋画 作者名：廣直高(1972-) 作品名：無題(陽) 制作年：2022年 材質・形状：染料、オイルパステル、ロープ、グロメット、キャンバス 寸法：258.2 × 212.0 cm 解説：廣直高は1972年大阪に生まれ、現在ロサンゼルスを拠点に活動を行う。本作は、近年の代表的な作風である、大きな二つの真円状の穴が開いた大画面の平面作品。ロープとグロメット、そして二つの穴は、絵具を塗布する前のキャンバスを天井から吊るし、作家の身体を包み込む繭のような形状にするために用いられる。身体とキャンバスとの物理的な距離をできる限り縮め、内側から体液を連想させる染料をスプレーボトルで噴射したり、オイルパステルを使ってストロークを描いたりしたあと、脱ぎすて広げられたキャンバスの上から描き加えることで完成する。キャンバスと身体を密着して制作された、作家の動きや痕跡を留めた生々しい画面が特徴である。普段意識ののぼらない身体部分への着目、映像などの多彩なメディアを用いた制作などは、師であるポール・マッカーシーの影響を感じさせるとともに、白髪一雄らの具体作家、また篠原有司男といった日本人作家らが取り組んできたアクション・ペインティングの系譜にも連ねることができる作品である。
		取得額：- 展示予定：令和7年度「コレクション展」にて展示予定
7		種別：洋画 作者名：ヨシダミノル(1935-2010) 作品名：The Orange Tent 制作年：1966年 材質・形状：油彩、キャンバス 寸法：195.4 × 280.4 × 10.0 cm 解説：ヨシダミノルは1935年大阪府生まれ、2010年京都にて死去。本作は、具体美術協会に所属していた1966年、グタイピナコテカでの個展に際して手がけられた。個展会場に設置されたステンレス製の、大きく湾曲した鏡が示唆するように、このオレンジの色面は歪んだ鏡像を表しているのだろう。「perspective (遠近) やdifferenceintime (時差) をテーマに」という当時の言葉を頼りにすれば、視覚による認知の不調、ないし遅延といった問題系が浮かび上がってくる。事実、その後のヨシダは、蛍光色の透明アクリル樹脂を用いたキネティック・アートによって、展示空間をサイケデリックな光と電子音で満たしていた。カラーフィールド・ペインティングやハードエッジ等、同時代の欧米における動きとも呼応しつつ、本作品は、後のヨシダの、環境芸術に類する仕事を予告するものとして位置づけられる。ヨシダの60年代の仕事を抑えるうえでも、そして具体美術協会後期の活動を知るうえでも、きわめて重要な一点である。
		取得額：22,500,000円 展示予定：令和7年度開催の「コレクション展」にて展示予定

8 	種別 : 写真 作者名 : 片山真理(1987-) 作品名 : 小さなハイヒールを履く私、子供の足の私 制作年 : 2011/23年 材質・形状 : 発色現像方式印画、オリジナル額装 寸法 : 各111.8 × 154.3cm (2点組) 解説 : 片山真理は1987年埼玉県に生まれる。9歳の時に先天性の四肢疾患により両足を切断。16歳より自身の身体を強く意識した創作活動を開始した。身体とその役割、周囲を取り巻く社会環境との関係性に対する根源的な問いかけに基づく作品によって、国内外で高い評価を得ている作家である。二部作として構成された本作は、片山の東京藝術大学大学院の修了作品。彼女の寝室でポーズをとったカラー写真には、自身の手により刺繍が施されたソフトスカルプチャーが床におかれ、多くの衣服や裁縫道具、材料やオブジェが所狭しと配置された中で、異なる衣装やウィッグを纏い撮影されている。「理想を抱く自由」をテーマにするとともに、女性性、官能性そして脆さを問う作品として高い評価を獲得。また本作は片山の手によるデコレーション・フレームというユニークな額装も施されている。 取得額 : - 展示予定 : 令和6年度「コレクション1 彼女の肖像」(2024年11月2日～2025年1月26日)で展示予定
9 	種別 : 映像 作者名 : クウワイ・サムナン(1982-) 作品名 : Untitled 制作年 : 2011-13年 材質・形状 : 5チャンネル・ビデオ(カラー、サウンド) 寸法 : CH1: 23秒、CH2: 22秒、CH3: 17秒、CH4: 15秒、CH5: 18秒(ループ) 解説 : 1982年カンボジア生まれのクウワイは、人と土地の歴史を主題とし、写真、映像、パフォーマンス、立体など多岐にわたる作品を発表。大虐殺以後に生まれた世代の作家として国際的に活躍しているだけでなく、後進の育成を通じて同国の現代美術シーンを牽引している。本作は、作家自身がブロンベンのさまざまな川や池に体を沈め、バケツで泥水を汲んで頭から被る様子が繰り返して映し出される、5チャンネルの映像インスタレーション作品。政治的・経済的な暴力に対する抵抗のジェスチャーであり、人間とそこに住む土地との根源的な関係について一考を促す。シングル・チャンネル、写真などのバリエーションで2010年代にアジア地域の国際展でたびたび展示されてきた代表作である。 取得額 : - 展示予定 : 令和7年度開催の「コレクション展」にて展示予定
10 	種別 : 映像 作者名 : 田中功起(1975-) 作品名 : ウォーキング・スルー 制作年 : 2009年 材質・形状 : シングルチャンネル・ビデオ(HD、カラー、サウンド) 寸法 : 55分 解説 : 田中功起は1975年栃木県に生まれる。映像表現を中心に、写真、パフォーマンス、テキスト、それらを複合したインスタレーションを制作・発表している。このシングルチャンネル作品は、55分ワンショットで撮影されている。中国の広州で集められたさまざまな日用品が裏庭のような場所に無造作に配され、作家はそれらの日用品にさまざまなかたちで介入していく。作られ、壊され、壊したものでまた別の何かが作られ、といったプロセスがただひたすら続く本作は、「編集」そのもののメタファーのようであり、また同時に当館の収蔵作品である《シンプルなジェスチャー》に場当たり的なスカルプチャー(2008)での作家の関心をさらに展開させたものとも見て取れる。 取得額 : - 展示予定 : 令和7年度開催の「コレクション展」にて展示予定
11 	種別 : 映像 作者名 : 田中功起(1975-) 作品名 : だれかのゴミはだれかの宝物 制作年 : 2011年 材質・形状 : シングルチャンネル・ビデオ(HD、カラー、サウンド) 寸法 : 11分 解説 : 田中功起は1975年栃木県に生まれる。映像表現を中心に、写真、パフォーマンス、テキスト、それらを複合したインスタレーションを制作・発表している。本作は、田中がアメリカ滞在中に制作したシングルチャンネル作品で、バサデナのフリーマーケットでヤシの葉(落ち葉)を販売する田中と客たちとの間で交わされた会話が主たる内容である。価値とは何かを問うユーモアにあふれたこの実践は、アメリカの黒人作家デイヴィッド・ハモンズの《雪玉セール》(1983)をアイデアソースとして参照しつつ、「コンセプト」「文脈」といった現代美術における批評性を問うものである。田中がこの後に長期的に取り組むこととなる、複数の参加者を招いて経験の共有可能性/不可能性を検討する映像作品の手前に位置する重要作である。 取得額 : - 展示予定 : 令和7年度開催の「コレクション展」にて展示予定

12	種別：洋画 作者名：榎木知子(1982-) 作品名：風呂と砂 制作年：2011年 材質・形状：アクリル、白色下地、紙、麻布、木 寸法：130.2 × 162.5 cm 解説：榎木は1982年京都府に生まれる。服飾デザインを学んでいた母の影響を受け、幼い頃から人物表現に興味を持つ。博士論文では自身の作品と美人画について考察し、自らが求めてきた表現が日本における伝統的な女性表現にあったことを確認する。本作は、大学院を修了した年の11月に開催した個展で発表した作品で、博士課程修了時から時間を置かず発表した5点の大作のうちの1点である。本作では、浴室の床面に伏せる人物が画面右下方部に描かれている情景にまず注意が払われることだろう。グレーの衣紋模様で表された布の表現で大半が覆われているその図像を人物であると特定できるのは、黒い衣服を着用した下肢が描かれている点と、そのグレーの大きな布の左端に人の両眼が描かれている点にあるが、本作品に描かれている人物が女性であることを示す要素は無い。この榎木の人物表現は、ジェンダーギャップを問うような姿勢とは対極的に、人間存在が、その周囲に存在するあらゆる物質と相対的に示されているかのようにも見えてくるのである。	取得額：- 展示予定：令和7年度開催の「コレクション展」にて展示予定
13	種別：洋画 作者名：竹村京(1975-) 作品名：はなのいろ 制作年：2015年 材質・形状：日本製釜糸、ドイツ製合成繊維、パーマネントマーカー、紙 寸法：300.0 × 700.0 cm 解説：竹村は1975年東京に生まれる。ベルリンでの活動を経て、現在は群馬県高崎で制作活動を行なっている。竹村は、写真やドローイングの上に刺繍を施した布を重ねたインスタレーション、またパフォーマンスや壊れた食器、日用品を布で包み絹糸で刺繍を施す「修復シリーズ」を発表。個人的な記憶や失われたもの、他者との関係性を再構築する作品群で評価が高い。本作は、竹村の祖父母がかつて生活した家をモチーフとして取り上げ、ドローイングで部屋の様子を描いた上に刺繍が重ねられる。東京藝術大学在学中に奈良で日本最古の刺繍『天寿国繡帳』を見学した際に、絹糸や刺繍の永続性や耐久性に感銘を受けたことから作品への使用を続けているが、祖父母と作家自身の時間そして空間の重層的な表現がなされた秀作である。	取得額：- 展示予定：令和6年度巡回展「ホーム・スイート・ホーム」（丸亀会場、2024年10月12日～2025年1月13日）にて貸与、展示
14	種別：洋画 作者名：竹村京(1975-) 作品名：E.K.のために 制作年：2015年 材質・形状：日本製釜糸、ドイツ製合成繊維、プリント、綿布 寸法：368.0 × 289.5 cm 解説：竹村は1975年東京に生まれる。ベルリンでの活動を経て、現在は群馬県高崎で制作活動を行なっている。竹村は、写真やドローイングの上に刺繍を施した布を重ねたインスタレーション、またパフォーマンスや壊れた食器、日用品を布で包み絹糸で刺繍を施す「修復シリーズ」を発表。個人的な記憶や失われたもの、他者との関係性を再構築する作品群で評価が高い。本作《E.K.のために》は、スウェーデン出身の女性活動家E.ケイの写真を用いたもの。東京藝術大学在学中に奈良で日本最古の刺繍『天寿国繡帳』を見学した際に、絹糸や刺繍の永続性や耐久性に感銘を受けたことから作品への使用を続けているが、モチーフとなったE.ケイと作家自身の時間そして空間の重層的な表現、また洋の東西そして時間を超越する女性の在り方が表現されている。刺繍の細やかさ、色彩の豊かさは特筆すべきものがある。	取得額：- 展示予定：令和6年度巡回展「ホーム・スイート・ホーム」（丸亀会場、2024年10月12日～2025年1月13日）にて貸与、展示
15	種別：洋画 作者名：手塚愛子(1976-) 作品名：Ghost I met 制作年：2013年 材質・形状：多色織（EPOTEX） 制作協力：川島織物セルコン 寸法：左：330.3 × 190.2 cm、右：330.7 × 190.3 cm（2枚組） 解説：手塚は1976年東京都に生まれる。本作は、2010年に渡欧した手塚が現地で本格的に制作した最初の作品。日本と、エジプトを含むヨーロッパの歴史上の美術作品等からモチーフを引用し、編集・再構成したデータをもとに川島織物セルコンの協力で織られた作品であるが、織物による絵画とも言えるだろう。モニター上でイメージを編集して作り上げたデザインを、各地の工房や織物会社との協働のもと織物によって再現するという作品制作は、2008年から現在まで断続的に続けられている。左パネルには日本、右がヨーロッパのモチーフで構成され、両パネルの中央には黒い影のようなイメージが鎮座する。これは、日本を離れ、ヨーロッパに拠点を移す中で直面した文化的差異と歴史上の影響関係、あるいは相似性を、織物のレイヤーの間を浮遊する「幽霊」の形で表わしたものである。手塚の知、直感そして経験から選択されたイメージの集合体は、装飾を生み出してきた先人たちの美意識、欲望、祈りとも接続しながら、新たな作品として差し出される。	取得額：- 展示予定：令和6年度「コレクション2」（2025年2月15日～6月1日）にて展示予定

16	種別	洋画
	作者名	手塚愛子(1976-)
	作品名	織り直し #04
	制作年	2017年
	材質・形状	解体された二種類の織物、平織り、木枠
	寸法	200.5 × 230.0 × 95.0 cm
	解説	手塚は1976年東京都に生まれる。絵画の探究のなかから織物の使用を開始し、織物の糸と解くという手法によって、あるいは刺繍の裏側を見せることで、普段は見えない内側や時間を引き出す作品へと展開した。《織り直し》はもともと2005年にVOCA展出品のために制作された（佳作賞受賞）。幾何学模様と花柄模様の2種の既成布の糸をそれぞれ解き、解いた糸を一本一本手で織り直している。作者によれば既成布は既に存在する白いキャンバスの、木枠は絵画のメタファーである。近代化によって輸入された西洋の絵画形式自体を壊しながら新たなものを創造する行為を表わし、布の柄は過去の歴史や文化についても示唆する。解いた糸を手織りするの複雑な工程で難しい作業のため同手法による作品は2005年以降作られることはなかったが、本作は12年ぶりに試みられたもの。
	取得額	-
	展示予定	令和6年度「コレクション2」（2025年2月15日～6月1日）にて展示予定
ほか1点／計17点 購入総額：730,952,224円		